

探 険 と 殖 民

— 明治期日本におけるアフリカ像 —

藤 田 緑

1.

「阿非利加洲」の廣大は、五大洲の第二番、南北二千三百里、西より東にいたるまで、ひろきところは二千餘里。四方の海岸湾曲なく、入海稀に河少なく、内地の様を探らんも、船の往来の便なし。唯海岸の一通り、西洋人の詮索をつくせし丈の物語。土地は廣くも人少なく、少なき人も愚かにて、文字をしらず技藝なく、北と東の数箇國をのそきし外は一様に、無智混沌の一世界⁽¹⁾

これは明治二（一八六九）年に福澤諭吉が著わした『世界國盡』のなかの「阿非利加洲」の冒頭である。七五調で綴られ毛筆習字体で書かれた下段と、さらに詳しい地理的内容と挿し絵を添えた上段から成る本書が、刊行された四年後の明治六年には小学校の教科書にも選ばれ、明治のベストセラーとなったことはよく知られている⁽²⁾。「婦女童幼の朗誦するところとなり、その結果、我が従来鎖国的な固陋的見解が、どの位修正されることとなったかは、測り得るべからざるものがある」⁽³⁾、というのが本書に与えられた一般的な評価であろう。それではここで少し詳しく『世界國盡』のアフリカ編を見てみることにしたい。

各国の紹介はエジプトから始まり、海岸線に沿って東部、南部、西部とまわって北アフリカの「ヘザン国」で大陸を一周した後、内陸部のエチオピア、スーダン、サハラ砂漠と進み、最後に大西洋上に浮かぶマデラ、カナリア両諸島、セントヘレナ島に触れて終わる。サハラ砂漠を含む二十九の地域が網羅されているが、ほとんどが国名、地名、河川名、海洋名を言及するにとどまっている。それ以外に数行費やされているのは、エジプト、マダガスカル、喜望峰、リベリア、モロッコ、アルジェリア、セントヘレナ島であり、それもピラミッドのあるエジプトとナポレオンが流されたセントヘレナを除きいずれも国政、国体について書かれているところに、福澤の問題意識、興味の有り様が見て取れよう。特にアルジェリアに関しては、四十年前にフランスの属領となり完全なる支配下に置かれている様子を「二百餘萬の人民は佛蘭西帝の旗風を仰て靡くばかりなり」と伝える。

問題はその上段に設けられた解説「阿非利加の事」である。本文をさらに補足する形で説明が加えられているのだが、たとえば冒頭に引用した「土地は廣くも人少なく、少なき人も愚かにて、文字をしらず技藝なく」という箇所は、「大抵黒奴にて風俗甚だ陋し。國々に王といひ帝と唱へて支配の君もあれども、強き者の力づくにて弱き者を苦しむる風なれば、争の絶間なしといふ」とあり、

事実の捉え方がはなはだ粗雑である。「強き者の力づくにて弱き者を苦し」め争いが絶えないのは、アフリカ人同士の衝突より西欧列強による植民地争奪の方が規模の上でもはるかに大きい。同大陸の南端「ほってんとちや発天戸地屋」の地には「實に愚にして人間の内の下等」な人々が住み、内陸の「えちをびや越尾比屋」地方の人々は「最も教なくして人情甚だ粗」く、人食い人種もいると書かれている。これは江戸時代後期に書かれた地理書の域をほとんど脱していないか、情報の正確さではそれ以下の内容である⁽⁴⁾。また日本を念頭においたと思われるアフリカと西洋との関係では、マダガスカルを例にとっている。マダガスカルは十九世紀初頭欧州諸国との交流を開始したが、国王の毒殺をきっかけに鎖国したため「國の威光」が衰え、近年再び開放政策をとったものの、以前のような繁栄はないと記し、婉曲に日本の開国の正しさを主張している。

明治四十三年、遙かアフリカ大陸南端に到達した志賀重昂（一八六三～一九二七）は、その感慨を『喜び望む峰とは』と、幼童の頃、福澤先生の『世界國盡』を暗誦せし以来、此年まで夢寝せし喜望峰に達し⁽⁵⁾と記している。原文はこうである。

「印度」地方へゆく船は、長の海路の「阿多羅海」、越えてしばしの碇泊に、旅の鬱もなぐさめん。喜び望む峰とは舟子の情を汲取りて、名を下したる文字ならん。

喜望峰はもともと十五世紀末にポルトガル人バルトロメオ・ディアスによって「発見」され、最初通過した時には嵐で気付かなかったことから「嵐の岬」と名付けられた。それをディアスから報告を受けたポルトガル国王ジョアン二世が、黄金の国インディエに通じる希望の岬であると信じ「喜望峰」と命名したと言い伝えられている。ところが欧米ではよく知られた地名の由来を福澤は知らず、長い航海のしばしの休息に、船員の気持ちを斟酌して喜望峰としたのであろうと書いている。

福澤諭吉は凡例のなかで

此書は世間にある翻譯書の風に異なれども、其實は皆英吉利亜米利加にて開版したる地理書歴史類を集め、その内より肝要の處だけ通俗に譯したるものにて私の作意ハ毫も交へず⁽⁶⁾

と述べている。そうであるならばこの『世界國盡』は、江戸時代同様、間接情報、欧米のアフリカ観というフィルターを通したアフリカ紹介であることに変わりがないことになる。ただ江戸時代の地理書との違いは、『世界國盡』の持つ浸透度、大衆性である。福澤諭吉は、誤った情報が多かったにせよ、アフリカ大陸の存在を全国津々浦々子供にいたるまで知らしめた。だが、丁寧に読むと決して『世界國盡』が単なる通俗的な翻訳でも「作為」がなかったわけでもないことは明白であろう。

個々に見ればネガティブなアフリカの記述は決して多くない。にもかかわらず、アフリカに関する限り『世界國盡』は日本人の「鎖国的な固陋的見解」を修正するどころか、かえってアフリカが

「無知混沌」の世界であるという極めて乱暴なイメージを植え付ける結果となった。そのネガティブな記述の強烈さと、冒頭の大雑把すぎる総括的アフリカ論は初歩的啓蒙書に必要な客観性を放棄していると言ってもよいだろう。巻末にあるアフリカ大陸地図は八割がサハラ砂漠とスーダン、エチオピアによって占められている。たしかにこれでは、「北と東の数箇國をのそきし外は一様に無智混沌の一世界」と読者が判断を下したとしても、それは無理からぬことである。「鎖国的な固陋的見解」を持つ日本人を近代アフリカへ導こうとした初歩的啓蒙書が『世界國盡』であったことは、アフリカにとって、あるいは日本の読者にとっても不運だった。

2.

二十世紀初頭、「無知混沌の一世界」を実際に踏破した日本人男性がいる。自称「五大洲探険家」中村直吉がその人である。彼の著書『亞弗利加一周』は明治四十三年（一九一〇）年、当時の流行作家押川春浪との共編で、『五大洲探険記』の第四巻として博文館より出版された。日本人によるアフリカ探険記の登場である。

愛知県豊橋市出身の中村直吉（一八六五～一九三二）は明治三十六（一九〇三）年にアフリカを訪れた。もともと中村は無銭旅行で世界各地を漫遊し、帰国後体験を少年雑誌等に発表し、好評を博していた。今でこそ無名であるが、彼は当時の少年たちにとってはちょっとしたヒーローであったようだ⁽⁷⁾。

中村直吉は現在の国名で言えば南アフリカ共和国、モザンビーク、タンザニア、ケニア、エジプト、アルジェリアの六ヶ国、十五都市をまわった。ほとんどが沿岸都市であり、内陸には足を踏み入れていない。唯一の例外が第二次アングロ・ボーア戦争（一八九九～一九〇二）が終わったばかりの南アフリカのキンバレーとヨハネスブルグであった。そこでデビアス社のダイヤモンド鉱山や金採掘場を見学している。彼の旅行記には船中での出来事や逸話が多く、訪問した都市や社会生活を立体的多面的に捉えることからほど遠かった。しかし、明治三十六年当時すでにアフリカで暮らす日本人を紹介し、貴重な証言を残している点では注目に値する。

南アフリカではケープタウンで「古屋君」が、ダーバンで「岩崎といふ」男性が雑貨店を経営し、東アフリカのタンガでは「田川といふ日本人が一人寫眞屋を營んで」いたと中村は実名を挙げる⁽⁸⁾。その他にも洗濯屋、コック等の職業についていた日本人がいたようだ。しかしアフリカで暮らす日本人の大半は春を鬻ぐ女性たちであった。中村直吉の記録のなかで単に「古屋」と名前を出す程度にしか触れられていないのだが、その古屋とは明治、大正時代を通じてアフリカで最も成功を収めた日本人といわれた古谷駒平である。

彼の名は南アフリカを訪れた日本人の記録のなかに多く見出すことができる。古谷駒平（一八七〇～一九一四）は明治三十一（一八九八）年ケープタウンに渡り、「ミカド商会」という店で雑貨と東洋古美術を扱う商売を始めた。アメリカ仕込みの流暢な英語と、ちょうど勃発した第二次ボー

ア戦争がもたらしたにわか景気で、南アでも屈指の商店に成長した⁽⁹⁾。「ミカド商会」という屋号も成功の一因であったかもしれない。William Griffis の *The Mikado's Empire* (邦題『皇国』) が発表されたのは一八七六年、ヨーロッパを魅了した Gilbert & Sullivan のオペラ *The Mikado* がロンドンで初演されたのは一八八五年であった。欧米では誰もが「ミカド」という名を知っており、人々の好奇心と東洋への漠然とした憧憬を象徴する言葉が「ミカド」であった。

中村直吉の話に戻ろう。中村は南アフリカで露骨な人種差別を経験した。ケープタウンからキンバレー、ヨハネスブルグへと、かつてのトランスバール共和国に移動しようとした際、中村は有色人種である事を理由に通行証の発行を拒否された。諦めきれない彼は現地の新聞『ケープ・タイムズ』の記者に不当さを訴え、大きな新聞沙汰に発展した。そのおかげでやっと三ヶ月以内という期限付きの旅行許可証を手にできた。無銭旅行者に対する冷淡な扱いには慣れていたはずの中村にとっても、公然たる有色人種差別は相当な屈辱であったようだ。のちに彼はこう言い放つ。

「所謂文明國の圧迫を被った黒人はミゼラブルなものだと思つた…白人と黒人と人類としての絶対價にどれだけの相違があるか」⁽¹⁰⁾

「黒人が白人と同等の社會的地位を占めることができないとしても、車室を異にしてまで酷遇する必要は何處にあるか。彼等は憐れむべき弱者ではないか。吾輩は賢明なる英人が今少し此點に留意して、彼等黒人を撫育し出来得るだけ彼等の福祉を増すことに力めることを望んで止まぬ」⁽¹¹⁾

黒人が南アで置かれた状況を、中村は「庇を貸して本屋を取られた」⁽¹²⁾と表現し、弱者になっ
てはいけないと訓戒を垂れる。だが弱者はいつまでも弱者ではなく、強者から受ける圧迫の反動は必ずあるもので、「現在英人のために苦しめられつゝある土人も、或は其位置を転倒して英人を支配するやうになるかも知れぬ。イヤさうならくてはならぬ」⁽¹³⁾、と当時であつては異例とも言うべき発言をしている。明治の日本人で南アの黒人支配への移行を予言した人物は中村をおいていない。

中村は「盛衰は必然の理」と主張する一方で、彼のアフリカでの差別体験は、同じ差別される者としてのアフリカ人との連帯には繋がらない。白人の植民地化には反感を持ちつつ、彼は自らを、そして自分の同胞を、支配者側に位置付ける矛盾には一向に頓着しなかった。

吾等は吾等の同胞をして、茫漠たる南米の天地を埋めしめ、且つ更に亞非利加大陸をも、旭日帝國の勢力下に置きたいと思ふ⁽¹⁴⁾

日清戦争後の日本がアジア進出をめざしていた当時であつて、中村直吉はアフリカへの拡張を夢見る数少ない日本人であつた。彼の『亞弗利加一周』で特筆すべきは、先にも述べたがアフリカで

活躍する日本人の情報をもたらしたことと、市井の人の旅行記であった点である。彼にはアフリカ人を特別軽蔑した様子は見られないが、アフリカへ出かけて積極的にアフリカの人々との接触を図ったとも思えない。彼自身の黒人観は全くといっていいほど欠落している。仄聞やアフリカ探検とは無関係な話が多く、実際に出かけた場所や出会った人々の描写、考察は少ない。それは一つには『亞弗利加一周』が押川春浪との共著であったせいかも知れない。また、中村直吉の旅行の目的が「五大陸制覇」にあり、アフリカは単なる地理的通過点の一つに過ぎなかったことを考えれば、現地社会との交流の乏しさは当然のことかも知れない。あるいは、アフリカ一周といいながらアフリカそのものの印象が希薄な中村の姿勢は、日清戦争の勝利を契機に変わり始めた日本の時代の雰囲気を反映していたのかも知れない。

3.

東海散士が明治二十二（一八八九）年に出版した『埃及近世史』は、日本人がエジプト人の側に立って書いたという点で、記憶すべき本である。エジプトの近代を開いたモハメッド・アリ国王の活躍から説き起こし、政治、経済、文化の各分野について今日から見ても正確な資料に基づく記述をしている。それよりも異文化を丁寧に理解しようとする基本的姿勢、彼の政治小説『佳人之奇遇』と同じように心を打つものがある。たとえば外国人が異様に思うミイラについても、散士は製法を紹介したのち、「親戚朋友悲哀シテ祭り、而シテ後告別シテ之ヲ墓地ニ埋葬ス、且ツ其喪祭ハ人民ノ最モ重ズル所ナリ」⁽¹⁵⁾と、ミイラづくりが、死んだ肉親への限りない情愛に基づいていることを示唆している。

明治の日本の風土は東海散士のようにアラブ人やアフリカ人と同じ眼の高さでアラブ・アフリカを見る人を産んだ。しかし明治中期まで一部にあった他民族、異文化理解の姿勢は、アフリカ関係を見るかぎり次第に衰弱していく。それは植民地経営の研究対象としてアフリカを見るようになったからである。散士自身にも変化が見られ、明治二十六（一八九三）年組織された「植民協会」の評議員となった。

明治二十五（一八八二）年、在ロンドン日本総領事館が纏めた『英国植民及移住ニ関スル報告』が、外務省移民課から出版されている。世界中に散らばる英国植民地の産業、賃金、物価についての記述があり、日本から移住する人々の参考書として書かれたことが窺える。

アフリカ研究が劇的といって良いほど変化を遂げるのは、明治二十七（一八九四）年の日清戦争以後である。このあたりから、貴族院、台湾総督府、陸軍、満鉄などが出版したアフリカ文献が多くなる。特に、翌二十八年の日清講和条約で日本に割譲された台湾を統治する陸軍省による軍政機関である台湾総督府が、アフリカを精力的に研究している⁽¹⁶⁾。

アフリカ紹介や研究のこの変貌は、台湾事務局が翻訳出版した『馬多加須加兒植民論』（一八九七年）に鮮やかに象徴されている。フランス人の著者ルローア・ボウリュエは、マダガスカルを手

中にするまでにフランスが支払った犠牲として、最初の戦争で十億フラン以上と二、三万人の軍隊を失い、二度目の戦争で一億フラン以上と四、五千人の兵士を失ったことを強調し、マダガスカルを保護国とするのではなく、フランスによる領有を説いている。東海散士は『佳人之奇遇』で一八八一年、フランスの宣戦に対して「国書を神机に奉じ」て泣いたラナバロナ二世女王、一八八八年、仏軍に捕えられレユニオン島に流されるラナバロナ三世女王の嘆き、兵装の貧しいマダガスカル軍の勇戦ぶりを描いた。彼の視点、心情と一八〇度違った本が、訳書とはいえ貴族院から出された。

政府、議会だけが他民族統治の研究に乗り出したのであれば、それは小説家の東海散士とは立場も視点も違うということが出来る。しかし、植民地研究の著書、論文、訳書は民間人によっても相次いで執筆され、出版される⁽¹⁷⁾。

代表的な著書を二冊挙げるとすれば、戸水寛人の『亞非利加ノ前途』（有斐閣書房、一八九九年）と、竹越与三郎の『比較殖民制度』（読売新聞社、一九〇六年）であろう。前者は日清戦争開始の明治二十七年に英国留学を終えて帰国した東京帝国大学法律科教授戸水が、アフリカ情勢全般を書いた二十一頁あまりの小冊子である。欧州列強によるアフリカ分割は一八八五年のベルリン会議から本格化し、この本が出版された一八九九年には各国の版図がほぼ定まっていた。同書は十九世紀末におけるアフリカ分割の全貌を、初めて日本に紹介したものとされる⁽¹⁸⁾。戸水は「第二十世期ノ（ママ）活劇場ハ支那ト亞弗利加ナリ」⁽¹⁹⁾として列強による分割の意図を説き、

亞非利加全州ハ忽チ白人ノ富ヲ増サン。数年以前ニハ暗黒亞非利加ノ名有リ。次世期ノ上半ニハ黄金亞非利加ノ名ハ生セン。而シテ共利ヲ分カツモノハ白人ニシテ黄人ニ非ズ⁽²⁰⁾。

と、日本人の奮起をうながしている。西野照太郎氏は「当時の日本における富国強兵論、領土拡張論に裏付けされたアフリカ観というべきもので、ヨーロッパの植民政策論の研究と結びつきながら、より積極的な植民地獲得論となっている」⁽²¹⁾と分析している。

『亞非利加ノ前途』で主役をつとめているのはローデシアを植民地化したセシル・ローズ、あるいはコンゴを領有したベルギーのレオポルド二世などで、当然アフリカ人やアフリカ社会に関する記述は少ない。記述の少なさは驚く程で、スーダン人について九行、エチオピア人について四行あるだけである。要するにアフリカについて書いてあるが、著者の興味の対象は植民地政策であり、産物であり、鉄道建設であり、戦闘である。アフリカ人の生活や風俗を取り上げようとする視点は全く無い。このことは、アフリカのイメージ「ゼロ」の時代の到来といえよう。

ジャーナリストから政界入りし、歴史家としても著名な竹越与三郎（一八六五～一九五〇）の『比較殖民制度』は、イギリス、フランス、ドイツという当時の代表的な植民地主義国の統治政策を比較研究した労作であり、アジテーターとしての性格の強い戸水寛人のアフリカ理解とは比較にならないほどの学識が窺われる。竹越は被支配民族の文化、伝統、感情の尊重を唱え、軍政より民

政を推奨している。同じ理由からイギリスの間接統治を最上策とし、アルジェリアでフランスがとった同化政策を「一百年間の大謬見」⁽²²⁾であると批判している。明らかに台湾、朝鮮の経営を意識しての研究であることは、次の序文にはっきり出ている。少し長いがここに引用する。

最初に得られたる我殖民地は臺灣なりと雖も、我國民は其殖民地を知らず、佛國がアルゼリヤを州県としたるが如くして之を統治せんと欲し、之を目して殖民地とするものあれば、則ち愕然として驚かんとす。今や朝鮮が保護國たるに至り、我國民はまた之を治むること、粗獷なる亞弗利加を治むるが如くならしめんとし、其二千年來の流風餘韻尚ほ存じ、湛恩濺澤、深く人心に入るものあるを思はざるなり。余平世、世論を敬重するに係らず、殖民地若くは保護國の議論に至りては、則ち孟浪杜撰、殆んど失笑に禁へざるもの少なからざるを見る。是の故何ぞや。余は其原本に於て数箇迷謬の見あるに由来するを信ず⁽²³⁾。

この中で竹越は「粗獷なる亞弗利加」と表現し、朝鮮とアフリカの差異を強調している。アフリカ文化は竹越にとっても無縁のものに見えたのだろう。そしてマダガスカルについては次のような記述をしている。

女王ラナヴァロナによりて治められしが、此女王は驚悍なること則天武后の如く、一時歐州人を政府より駆逐して僅かに一人を止むるのみなりき。此一人はラポルトと呼ぶ佛國商船の水夫にして其船の難破したるがため岸に打ちよせられしを、土人捕えて女王の許に至り之を殺せんとしたるに、女王其容姿の清麗なるを見て、許して後宮に入らしめたるものなり⁽²⁴⁾。

アフリカの風俗、文化も国によって、時代によって異なるため断言は出来ないが、一夫多妻制が一般的なアフリカにおいて、女王が愛人を持つのはともかくとしても、複数の男性を入れる後宮を持つということは、事実とは考えにくい状態である。こうした東海散士を嘆かせるようなアフリカのイメージが日本に広がって行く。その事態を招いた原因は二つあると考えられる。

第一は、西欧流のアフリカ観の受け売りである。第二は日清戦争、日露戦争の勝利、特に日露戦争の勝利によって日本が列強の一角にのし上がったことである。『比較殖民制度』の巻頭に竹越与三郎は「最初に琉球を領有し、つぎに臺灣を略取し、最後に朝鮮を保護国とし、常に我宗主権の伸長と離るべからざる関係を有する伊藤侯に此書を呈す」と、献辞を掲げている。日露戦争後、「我宗主権」は満州と樺太にも伸長することとなった。

イメージの形成は観る者の眼前に現われる対象物のありようのみによって決定されるのではないであろう。観る側の条件の変化が、イメージ形成に決定的影響を与える場合も考えられる。日本人のアフリカ観、ひいてはアジアを含む途上国全般に対するイメージが、日清、日露戦争を境に変わったということが出来るのではないだろうか。植民地統治は、支配される側の人間性や心情を重視し

ていては達成しがたいし、相手を外国による統治を受ける以外に道のない民族だと決め付けることが、支配の意思を揺るぎのないものとする。その点日本は、西欧が齎らすアフリカのイメージを信ずる方が、そして西欧の主観と論理を近隣諸国に適用する方が、自己の正当化を容易にしたと言える。

4.

自称「五大洲探検家」中村直吉が日本の民間人としては初めてアフリカを旅行した明治三十六（一九〇三）年、行く先々で彼はそこで生活する日本人に出会っている。その大半が女性であることは先に述べた。「何處へ行つても日本婦人が一種の發展を盛にやつてるのには驚かざるを得ない」⁽²⁵⁾と中村が指摘する「日本婦人」とは言うまでもなく「醜業婦」や「娘子軍」と呼ばれていた女性たちのことである。一般には「からゆきさん」として知られる彼女たちは、東南アジアを中心に明治二十年以降急増したといわれている⁽²⁶⁾。シンガポールを例にとれば、その数は明治十五年頃の約六十人ぐらいから明治二十年では百余人、明治三十年頃には九百人近くにのぼっていたらしい⁽²⁷⁾。いつ頃彼女たちがインド洋を南下してアフリカ南東部諸島及び沿岸地域に進出したのかははっきりしない。考えられるのは各地で起こった廃娼運動の影響を受けてマレー半島を拠点にしていた彼女たちの一部が、距離的には近いが厳しい移民政策を取っていたオーストラリアを避け、アフリカに別天地を求めたということであろうか。しかし、最終的なシンガポールでの娼婦追放は大正九（一九二〇）年に決定されていることから、全く別の事情が介在していたのかも知れない。

三億の衆生を有する印度には現に一千の日本婦人あり、新嘉坡における七百の同胞姉妹は最近數年に在て多く各國の出稼婦を驅逐し、印度洋に延いて終に喜望峰を侵し今や百餘の姉妹は南阿の一角に散在して金剛石の夢に酔へる白人を征服しつゝ娘子軍の第一線を彼處に敷けり、偉ならずとせずや⁽²⁸⁾。

これは、明治四十三年アルゼンチンの独立百年祭に日本代表として列席する志賀重昂に同行取材していた『大阪毎日』記者大庭景秋（柯公）が、インド洋上にあるモーリシャス島を經由して南アのケープタウンに立ち寄った折に記した文章である。百人もの「からゆきさん」たちが南アに居留していたという確証はないが、大庭は彼女等の存在を決して否定的にとらえなかった数少ない明治人であった。「聞くだにいまはしい醜業婦」⁽²⁹⁾と書いた中村直吉とは対照的である。「偉ならずとせずや」としたのも、日本政府の、ある時は彼女等を厳しく取り締まり、またある時は出稼ぎを奨励するというような方針の一貫性の無さへの皮肉であるといえる。モーリシャス島で出会った四人の「日本婦人」から、彼は十年前にも数名の女性たちが同島に行き着き、同じように生活していたことを伝えている。

明治三十六年アフリカを訪れた中村直吉はケープタウンで二人、ベイラ（モザンビーク）三人、ザンジバル十人⁽³⁰⁾ モンバサ（ケニア）で五人の「日本婦人」の存在を確認している。ケープタウ

ンにも日本人娼婦がいたようだ。大庭柯公が「ケープ・タウンの一等街に二個の商店を開きて専ら日本品を商ふ、邦人の代表者として八萬の市民中に盛名と信用とを博す」⁽³¹⁾と著書のなかで言及した茨城県土浦出身の古谷駒平がはじめて南アにやって来た明治三十一（一八九八）年、古谷はすでにケープタウンに『影の女』が二人進出していた⁽³²⁾と証言している。他の日本人男性から聞いた話として古谷は、ケープタウンの二人は、東南アジアにいた娼婦七、八人が「娘子軍」を編成して印度洋を横断南下しマダガスカル島に場を移し「暗躍」していたところ、何らかの事情が生じてさらに南下した結果であるという。

南アにはもっと古くから彼女たちがいたという説もある。南アフリカの二代目領事今井忠直は南アフリカにおけるアジア人排斥の遠因を日本人娼婦に求めている。

キンバレーといふところにダイヤモンドの鑛山が発見せられ、その附近一體が非常に賑はつて来た時に、今から言へば嘘のやうな話であるが、當時印度のボンベイ方面にゐた日本の多数の醜業婦が、まだ日本人は誰れも行つたことのないこのキンバレーに隊を成して出稼ぎに行つた。今なほ彼の方面の古老の話によると、自分は日本の娘さんをよく知つてゐるといふ者が澤山ある。兎に角日本の多数の醜業婦があつた方面に跋扈してアジア人排斥の一因をなしたことは事實であるらしい⁽³³⁾。

キンバレーでダイヤモンド鉱床が発見されたのは一八六七年、慶応三年のことである。ボンベイ方面の日本人娼婦に関する詳しい資料は手元にないが、シンガポールでの日本人第一号が明治三、四年頃で、それから十年の間で五十人ぐらいに増えた⁽³⁴⁾ことから推測すれば、今井の言う通りキンバレーで起こったダイヤモンドラッシュの初期の段階で日本人女性が参入することもありえないことではなかつただろう。もしそれが事実であれば、異人種間結婚はもとより異人種間の性交渉にとりわけうるさかつた南アで、黄色人種の日本婦人の行為は、南アに居住していたインド人を標的としたアジア人の追放に、格好の材料を与えたと考えられよう。

5.

国粹主義者であり、地理学者でもあつた志賀重昂（一八六三～一九二七）は明治四十三（一九一〇）年四月と大正十一（一九二二）年九月の二度南アフリカを訪れている。その際の南ア事情はそれぞれ『世界山水圖説』や『知られざる國々』に収録されている。最初に訪問した明治四十三年四月はちょうど南アフリカ連邦が誕生する直前で、一方に有色人種の選挙権獲得運動、他方にイギリス系とオランダ系の民族対立からくるケープ、オレンジ、ナタール、トランスバールの各地域間の連邦首相の座をめぐる権力争いが熾烈な時であつた。志賀は連邦成立の暁には、「如何様の形勢となるべきや、疑問と云ふべし」⁽³⁵⁾と、南アの前途の多難さを予見している。セシル・ローズは八年前にこの世を去っていたものの、ローズの盟友ジェームソン博士はまだ南アに留まり、来るべき連

邦内閣人事を睨んで活発な動きをみせていた。日本との関連では志賀は南アを有望な貿易市場とみなし、ケープタウンで日本美術品や雑貨を手広く商う前述の日本人実業家古谷駒平の成功を讃えた。

二個の店を開き、随分の信用を博し居るは、西洋人が自分の妻を指し「古谷の店には欲いもの許りあるとて度々同店に行くには私も困り入ります」と笑ひて打ち語りたるにて反測せらる⁽³⁶⁾。

ケープタウン市の助役邸に招待された志賀は、そこに飾られていた古伊万里、古薩摩のコレクションに驚く。看過されがちだがケープと長崎出島は、ケープが十九世紀に英国に委譲されるまで、ともにオランダ東インド会社と密接な関係にあった。したがって、オランダ東インド会社のVOCマークの入った陶磁器類はケープでも常用されていた。今でも南アの博物館、美術館、民俗資料館に行くと、ヨーロッパ輸出用の十七、十八世紀有田の絵皿、壺、鉢や、古漆器を見ることが出来る。志賀も短い滞在期間中の方々でそれらを見る機会があったのだろう、「喜望峰こそ日本古物品を蒐集すべき好個の處」⁽³⁷⁾とまで述べている。

これほど詳しく南アを紹介した志賀だが、人口の大半を占める黒人、カラードに対する言及は皆無に等しい。志賀は白人間の対立にはたいそう関心を示し詳しく伝えたが、有色人種問題、ことに発足間近の連邦議会での非白人への選挙権付与をめぐる差別にしても事実関係を簡略に述べたにとどまる。志賀は上陸したばかりのケープタウンの街角で菊の花を売る少女の姿を見かけ、日本では四月は春だが「成程南半球にては秋の半たるよ」と感慨にふけるが、黒人に触れている部分といえは彼に季節の違いを実感させた花売りが「ゾールー亡國の少女」であったことと、『世界山水圖説』に収録された英国人を乗せて人力車を曳いている黒人の写真一枚だけである。これには「カプフィル土蕃の人力車夫」のタイトルの下に、「英人が全く土蕃を征服せし實況を知るべし」⁽³⁸⁾という説明が付されている。

日本の人力車はここアフリカにまで到達していた。志賀が使用した写真は南アフリカの写真集 *Views of South Africa* (『南アフリカの景観』)にあるものと同じである⁽³⁹⁾。志賀は白人が黒人の曳く人力車に乗った光景を、支配者と被支配者の関係になぞらえたが、その写真集では、「初めてダーバンを訪れる旅行者にとって人力車ほど魅力的なものはない」と紹介されている。さらに、馬車はもはや影を潜め、たくさんのリキシャ・ボーイたちが路上に溢れていること、そのほとんどがズールー族で、駝鳥の羽根や牛の角を頭飾りに付けた奇妙な格好で飛んだり跳ねたりしながら客引きをし、彼らを見ているだけでも楽しいこと、リキシャはマリツバーグ市でも流行しており、ヨハネスブルグやその他の地域にもあることなどが記されている。交通手段としてどれほど頻繁に使用されていたかはこの一文から判断できないが、二十世紀初頭の南アにあって人力車は観光の呼び物になっていたことは窺える。中村直吉もダーバンで人力車を見ている。「聞けば英政府が土人に生業を與へる主旨で、日本風の人力車を輸入」⁽⁴⁰⁾したと中村は述べている。なお、明治期に輸出

された人力車総数は約十七万台、アフリカでは南部に集中しており、北アフリカへも一時輸出されたことがあった⁽⁴¹⁾。

十二年後の南ア再訪で志賀重昂は市内電車から待合室、休憩所、飲食店、公衆便所、ベンチにいたるまで European Only, 白人専用の看板を目にして驚く。志賀自身は南ア連邦内務大臣や鉄道副総裁からの英国王立地学協会名誉会員であることを明記した紹介状のお陰で滞在中それほど差別には遇わなかったが、同じ頃南アで他の日本人が経験した様々な差別の実態を伝えている。例えば、ヨハネスブルグで開催された第一次世界大戦の祝勝大会に連合側として参加した三人の日本人が、場内で「有色人種」を理由に袋叩きに遇い、ほうほうの態で逃げ帰ったこと、ダーバンで市内電車の「白人専用」の二階席に乗り込んだところ、車掌から首を掴まれて下車させられた南ア訪問中の駐南米総領事と副領事、やはりダーバンで公用パスポートを提示したにもかかわらず上陸を拒否された九州帝国大学教授、プレトリア駅で赤帽に荷物の運搬を拒否された領事館職員やタクシーの乗車拒否にあった大阪商船社員等、枚挙にいとまない。志賀はひとつの極端なエピソードを披露しながら、差別の生む悲喜劇を次のように結んでいる。

ケープ・タウン日本領事館の一書記生が「有色人」として余りの侮辱にたえず白粉を塗り出でたりと、是も滑稽と云へば滑稽、心事を察すれば同情に値する事実もある⁽⁴²⁾。

日本領事館は大正七（一九一八）年ケープタウンに開設された⁽⁴³⁾が、前出の二代目領事今井忠直も、着任の折、現地官吏によって最初は入国を拒否されている。子供の小学校編入も、旅行先でのホテルの宿泊も、日本人であることを理由に断られ、彼のアメリカ白人の妻に交渉させて初めて受け入れられたほどだった。

志賀は二度目の訪問で当時の南ア連邦首相スマッツと会見している。「ミカド商会」の世話でヨハネスブルグから車で首都プレトリアに赴き、予約もなくいきなり連邦政庁に入って、「英国王立地学協会名誉会員」と書かれた名刺一枚を手渡し、面会にこぎ付けた。恐らく南アでの想像を越える日本人差別が志賀をプレトリアまで行かせたのだろう。『知られざる國々』によると、日本の陸軍や中国の国政について尋ねるスマッツに一通り答えたのち志賀は、「南阿に於ける有色人の侮蔑的待遇の日本人に波及せる」ことを縷々語り、「將軍の反省を促した」⁽⁴⁴⁾とある。口頭では意を尽くせなかった志賀はスマッツに書簡を寄せ、英国と日本との関係、先の大戦での日本の活躍、ことに南ア、モーリシャス近海の日本軍艦による防御を強調し、そのうえで一つだけ「閣下」に「日本人を『人』として待て」ということをお願いしたいと訴えた⁽⁴⁵⁾。同じように「侮蔑的待遇」を受けている黒人やその他の有色人種よりも、日本人の処遇を彼は優先させている。他の非白人と同列に扱われることを忌避し、日本人だけが「有色人」のカテゴリーから抜け出で、白人と同等であることを求めたのだとすれば、一九六〇年代に日本人が「名誉白人」の称号を受け入れた心理と奇妙

に一致する。たった一例から敷衍するのは危険だが、志賀重昂のアフリカ人不在のアフリカ観は、明治末から大正に及ぶ日本人のアフリカ理解の一典型であったといえよう。この傾向は中村直吉、戸水寛人にも当てはまるように思われる。

6.

日本とアフリカの交流を促す貿易関係は、ゆるやかに発展していった。明治時代に人力車や繊維雑貨類（浴衣地、絹織物、提灯、竹細工など）がアフリカへ輸出されていたのは、例えば明治四十五（一九一三）年のリヨン駐在領事木島孝蔵のマダガスカル報告⁽⁴⁶⁾などによって知ることができる。しかし、ベルシャ商人などを代理店としての取引であったと同報告にはある。

アフリカとの貿易が、公式統計として大蔵省によって発表されたのは明治三十四（一九〇一）年が最初であり⁽⁴⁷⁾、金額は明治三十一年に日本からの輸出が十一万五千元、輸入が三十五万五千元であった。しかしこれは、エジプトのみを対象とした数字である。

大正時代に入ると公式統計にエジプト以外のアフリカ地域として「喜望峰殖民地及ナタル」、つまり現在の南アフリカ（正確には南アフリカ共和国のケープ州とナタール州）が登場する。だが金額は大正元年で日本の輸出四十五万三千元、輸入は実に百五十五円という規模にすぎなかった⁽⁴⁸⁾。これは現在の金額に換算するといくらになるだろうか。一つの目安として、明治四十（一九〇七）年の米一石の値段を、昭和五十九（一九八四）年のそれと比較すると二千八百四十六倍となり、この倍率をそのまま当てはめると輸出は十二億八千九百万円、輸入は四十四万円に相当する。交易はまだまだ乏しく、まして代理商を通じての取引だったとすると、日本商人の往来はごく限られていたことになるだろう。

大正十三（一九二四）年になると、アフリカは一つのまとまった地域として、公式統計に扱われている⁽⁴⁹⁾。同年の金額は輸出が四千二百二十万円、輸入が二千二百七万円と、それ以前に較べ飛躍的に増加している。南米地域との貿易よりアフリカとの輸出入の方が、金額では上である。しかし大正十三年、全世界に対する日本の輸出は十八億円、輸入は二十四億円に達していた⁽⁵⁰⁾。それからみるとアフリカに対する輸出入は、全体の二%弱にすぎなかったことがわかる。金と物の流れの乏しさは、同時に人間の交流の乏しさであり、アフリカのイメージを形成しようにも、一次情報はごくごく限られていたであろう。そして大正八（一九一九）年、アメリカからターザン映画がやってきて、イメージ形成に決定的な影響力をふるうことになる。

《註》

(1) 福澤諭吉『世界國盡』、『日本教科書大系』近代編第一五巻地理（一）、講談社、一九七五年）、一九頁。

句読点は引用者。以下『世界國盡』の「阿非利加洲」からの引用頁数は略す。

- (2) 前掲書の解説によると、『世界國盡』は明治二年出版、同四年に再版(二種類)され、明治五年に『素本世界國盡』が、同八年に『真字素本世界國盡』が刊行された。『世界國盡』は「著しい普及をみた啓蒙書」(六二二頁)であったと書かれている。
- (3) 本間久雄『明治文学史』(東京堂、一九三五年)上巻、一〇頁。
- (4) 江戸時代の輿地誌に描かれたアフリカ地理に関しては拙稿「江戸時代における日本人のアフリカ観」(日本中東学会編『日本中東学会年報』第二号)に詳しい。
- (5) 志賀重昂『世界山水圖説』(富山房、一九一一年)、六九頁。
- (6) 『世界國盡』第一巻「亞細亞洲」、五頁。名著復刻全集の復刻版『世界國盡』(近代文学館、一九六八年)より。句読点は引用者。
- (7) たとえば『探検世界』では明治三十九年六月号に「世界徒歩旅行者中村直吉君」の記事が、また同年十二月号には「中村直吉君全世界探險譚」が彼の写真とともに掲載された。さらに、翌明治四十年七月号でも紹介されている。またこの後、『冒険世界』でも彼の記事を見ることが出来る。
- (8) 中村直吉・押川春浪『亞弗利加一周』、博文館、一九一〇年。引用はそれぞれ六四、一二一、一五九の各頁。
- (9) ダーバンで岩崎と彼の共同経営者である小川等に会った中村は、南アに渡ったいきさつからこれまでの経緯を直接彼らから聞いている。ボーア戦争は、彼ら洗濯屋、雑貨屋にも恩恵をもたらし、中村が訪れた明治三六(一九〇三)年には三〇名近いインド人の使用人を雇い入れるまでになっていた。中村、一二二～一二三頁。
- (10) 同、七六頁。
- (11) 同、七七頁。
- (12) 同、一三〇頁。
- (13) 同、一三〇～一三一頁。
- (14) 同、一六一頁。
- (15) 東海散士(柴四郎)『埃及近世史』(国文社、一八八九年)、三六五頁。
- (16) この時期以降、民間人が書いたものとしては戸水寛人『亜弗利加ノ前途』(有斐閣書房、一八九九年)、山田三良『コンゴ自由国ノ発生及消滅』(国家学会雑誌、一九〇九年)、有賀長雄「白耳義国王及コンゴ独立国」(『外交時報』第二八号、一九〇〇年)、アルフレッド・カルデコット著、水崎基一訳『英国殖民史』(大日本文明協会、一九一〇年)、H.E.エゲレアトン著、永井柳太郎訳『英国殖民發展史』(早稲田大学出版部、一九〇九年)など多数ある。
- 特に明治三十四(一九〇一)年以降、ボーア戦争についての著書、論文が目立つ。また当局側が出したアフリカに触れた本として『ズールー戦争報告』(陸軍文庫、一八九〇年)、C.D.ルーカス著『英国殖民史』(台湾総督府、一八九八年)、ウィリアム・アンソン『英国殖民地印度及雜領地制度』(台湾事務局、一八九八年)、ルロアー・ボウリュウ『馬多加須加兒殖民論』(拓殖務省、一八九八年)、『殖民法制著書

目次集』(台湾総督府、一九一〇年)、『仏国新領地アルゼリアニ於ケル行政』(貴族院事務局、一八九八年)などがある。

- (17) 註(16) 参照。
- (18) 西野照太郎「明治期における日本人のアフリカ観」(『東洋文化研究所紀要』第三二分冊、一九六四年)、一六〇頁。
- (19) 戸水寛人著『亜非利加ノ前途』、一七頁。
- (20) 同、二〇頁。句読点引用者。
- (21) 西野、前掲論文、一六二～一六三頁。
- (22) 竹越与三郎『比較殖民制度』(読売新聞社、一九〇六年)、五〇頁。
- (23) 同。
- (24) 同、一二七～一二八頁。
- (25) 中村、前掲書、六五頁。
- (26) 入江寅次『邦人海外発展史』(井田書店、一九四三年) 上巻、二三一～二三三頁。
- (27) 入江、前掲書、二三一頁。
- (28) 大庭柯公『南北四万哩』(政教社、一九一一年)、二〇頁。
- (29) 中村、前掲書、一二三頁。
- (30) 毎日新聞記者、後の毎日新聞社社長山内大介は昭和三十四(一九五九)年訪問先の東アフリカのザンジバル島で、望郷の念にうちひしがれている「おトヨばあさん」という日本人の老婦人の話を聞いている。ひょっとすると、彼女は明治三十六(一九〇三)年に中村直吉が書いたザンジバルにいる十人の春をひさぐ女性たちの一人であった可能性もある。山内大介『黒い大陸—アフリカからの報告』(毎日新聞社、一九五九年)、二〇一頁。
- (31) 大庭、前掲書、三七—三八頁。
- (32) 入江前掲書、二三七頁。
- (33) 今井忠直『注目すべき東阿と南阿』(文明協会、一九二九年)、二〇頁。
- (34) 入江、前掲書、二三一頁。
- (35) 志賀、前掲書、八三頁。
- (36) 同、七二頁。
- (37) 同、八六頁。
- (38) 同、八二頁。
- (39) *Views of South Africa*. 'Published by W. Lawrence, Bloemfontein' と書かれており、出版社、刊行年の記載はない。ただ写真に添えられた文章から判断すると、ボーア戦争後、南ア連邦発足以前に刊行されたものであることは確かである。
- (40) 中村、前掲書、一二七頁。

- (41) 齊藤俊彦『人力車』(クリオ、一九七九年)、二二三、二二九～二三二頁。
- (42) 志賀重昂『知られざる國々』。
- (43) 日本と南アの外交関係は、領事館開設に先立つこと八年、明治四十三(一九一〇)年に Julius Jeppe を名誉領事に任命した時より始まった。
- (44) 志賀、『知られざる國々』、四二六頁。
- (45) 同、四二八～四三一頁。
- (46) 木島孝蔵「マダガスカル島ト東洋特ニ本邦トノ間ノ貿易状態」(『マダガスカル島視察報告書』、『移民調査報告十二、メキシコ、ペルー、マダガスカル島』、一九一三年)、二〇五～三七四頁。
- (47) 『大日本外国貿易対照表、自明治元年至同三十二年』(大蔵省、一九〇一年)、二五、三三頁。
- (48) 『大日本外国貿易対照表、自明治元年至大正二年』(大蔵省、一九一五年)、三〇、三九頁。
- (49) 商務局貿易課『大正十三年本邦貿易状況上巻、一般状況』(農商務省、一九二五年)、八～九頁。
- (50) 同、一〇頁。